
騎士を燃やすは復讐の炎

泡沫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騎士を燃やすは復讐の炎

【Nコード】

N4977X

【作者名】

泡沫

【あらすじ】

この世に争いが絶えぬ理由は何か。それはきつと憎しみが絶えぬからである。この物語はすべてを奪われた一人騎士のお話。どれほどの涙を流し、どれほどの血を流せば復讐が遂げられるか、それは誰にもわからない。ただ、騎士はその手に持った槍斧を振るう。憎むべきものをすべて殺すために。その身を赤に染め、ただ行くは修羅の道。騎士が行きつく先は・・・どこにあるのだろう。

プロローグ 緋の魔人亭（前書き）

この物語はフィクションです。

人物、国家、組織名等は実在のものとは一切関係ありません。

魔法といったものは現実世界では存在せず、仮に存在していたとしてもその存在が明らかにはなっておりません。

プロローグ 緋の魔人亭

一つの世界がある。

『グラント』そう呼ばれる世界、いや一つの大陸と言った方が正しいか。

この大陸では争いが続いている。

人と魔物、その二つのものが代表として、そのほかにも細々とした争いが。

人と魔物、その争いの原因は明らかだ。

大陸の覇権、それを争っている。

どちらが正義であり、悪であるか、それは分からない。

人にとっては人が正義で魔物が悪だし、魔物にとっては魔物が正義で人が悪だ。

結局どちらが勝ったとしても、また人なら人同士、魔物なら魔物同士で争いが始まることは分かっている。

その場合は自らが正義、争う対象が悪、とみなされる。

正義と悪とはたやすく入れ替わる。

そんな世界では、個人は振り回されるしかない。

国や陣営、そう言ったものに縛られ、自分の思惑とは別の何かの為に動く。

それを良しとしないのは、数多くいるはずだ。

しかし、生きていく上には職に就き、金を稼がねばならない。

そして、普通の職業では国に属さないで生きていくことなど不可能だ。

騎士、兵士といった者は雇うものが居なければ成り立たない職業だ。

商人も、国というのは最大のお客様であり、関わらずにやっていくことは難しいだろう。

そして、国としても、その現状は不便であった。

国に所属している者を使う場合、どうしてもその身分を証明しなければいけない。

それはどうしても手間がかかる。

また、公には出たくない後ろ暗いこと、もしくは国の要人の個人的なことを頼むにはいささか不便であろう。

個人は誰にも縛られないことを、国は使い捨て可能な自由な人材を、共に求めた。

故に、この職業が生まれたのは必然とも言える。

どこの国にも属さず、自らの思惑で動き、個人や国の依頼を受けてそれを遂行し、その代金を糧とするもの。

単純なものの探しから始まり、魔物の討伐、諜報活動、上げ始めればきりがない。

そんな者たちを、人は冒険者と呼んだ。

冒険者は数多く存在する。

まさに星の数、とまでは言わないものの、それに近い数の者が居る。

それだけの者が居れば、冒険者とひとくくりに言ってもどう言う者だ、と言うことはできない。

しかしその全ての者に共通していることがある。

それは信念を持っているということ。

高尚なものから極めて個人的なもの（例えば恋人を作るだの、金を稼ぐだの）まで、その信念は千差万別である。

それでもそれを確固たるものとし、冒険者として励んでいる。

冒険者とは、自由だ。

自由、それは響きだけ聞けばとても素晴らしいものに聞こえることだろう。

しかし自由とは自らですべての責任を負うということでもある。ましてや、冒険者の仕事は危険なものが多い。

いくら腕に自信のあるものであろうと、死ぬことは珍しくない。

それは不意の事故だったり、味方の裏切りだったり、理由は様々であろうが。

故に冒険者になるということはそれを覚悟するということである。そうでないものはそもそもなろうとしないか、それかなくてもすぐに命を落とす。

冒険者は甘い職業ではない、それだけは覚えておいてほしい。

しかしその一方で信念を持ち、冒険者になった者はほぼすべてがちゃんと暮らしている。

それだけ、縛られずに動くということが魅力的であり、そしてそれだけの量を賄えるほどの依頼がある、ということでもある。

今から始まる物語は、そんな冒険者たちの集う場所である、とある宿を舞台とする。

『緋の魔神亭』、この国「アリアクルス」においては最も大きな宿。

宿の主人の名はガリアス。

元冒険者の男で、宿の名前にもなっているが、冒険者時代は『緋の魔神』と尊敬と畏怖を込めて呼ばれていた男である。

今は第一線を退き、宿の主人をやっているが、カウンターに立つ彼の横には愛用の斧が立てかけてあり、必要とあれば振るわれる。

ガリアス本人は自らはロートルだと言うが十分な力を持っていることは宿の冒険者たちが認めるところである。

これから語られるはそんな宿に訪れる一人の騎士の物語。

しばらくお付き合いいただけることを切に願います。

ブログ 緋の魔人亭（後書き）

初めての投稿となります。

あまり筆の早い方ではないのですが、なるべく週1以上のペースを保って行きたいと思います。

まだ拙いところが多々あると思いますが、どうか末永くお付き合い合
いいただけることを願っております。

第一話 訪れる騎士（前書き）

この物語はフィクションです。

人物、国家、組織名等は実在のものとは一切関係ありません。

魔法といったものは現実世界では存在せず、仮に存在していたとしてもその存在が明らかにはなっておりません。

第一話 訪れる騎士

日も落ち始め、酒場も兼任している宿では盛り上がりを見せる時間帯。

そんな宿の一つである『緋の魔人亭』でもそれはさほど変わりない。

冒険者の集う宿ではあるが、冒険者も人間であり、話もすれば酒も飲む。

普通の人間とさほど変わりはない。

ただ、普通の人間よりもごつかったり、変わり者が多かったりするが、まあそれはご愛嬌というものであろう。

そんな宿の中、酒場のカウンターには一人の男が立っていた。

日に焼けた浅黒い肌、筋骨隆々で、頭はきれいに剃り上げられている。

右の眼は大きな傷により塞がれ、残った左の眼は黒く輝いている。身長は2mにも及ぶだろう。

がつしりとした体形で、見ているものには威圧感すら覚えさせる。この男こそ、『緋の魔人亭』のオーナーで、『緋の魔人』と呼ばれていた、ガリアスその人である。

カウンターに座る者もちらはらいるが、今日の客は大して話の好きな者も居ないようでガリアスは時々受ける注文をこなしながら、ただ黙々とグラスを磨く作業を行っていた。

ふとグラスを磨く手を止めて、店内を見回す。

店内には如何にも悪党といった面の者や、堅苦しそうな老人、何か虚空に話しかける美女や、明らかに成人していないように見える少年など、居る人間には統一感の欠片もない。

だが、その全てが特に争うでもなく、むしろ仲良さげに語らっている。

ガリアスはそんな風景が好きだった。

自分が誰であるということも気にすることなく語らえるということとは何物にも代えがたいことである、そう思うのは孤児であったガリアスだからこそかもしれない。

ガリアスは貴族というものがあまり好きではない。

偏見も多少混じっているだろうが、人を見下し、人をまるで物のように扱う。

偉そうにしている割には自分では何もしない。

それは冒険者をやつて、引退した今の身でもつくづく思うことだ。貴族の依頼、というものは依頼の約半数を占めているが、その依頼を見るたびに偉そうな物言い、そして無茶な要求を見ることが多い。

昔、冒険者として働いたときも魔物によつて命の危機に陥ったときもあつたが、それと同じぐらい、いやそれ以上かもしれないほど貴族の謀略に巻き込まれて命の危機に陥ったこともあつた。

今思つても、実に面倒なことが多かった。

後継者争いに巻き込まれ、罪をかぶせられたこともあつたし、貴族の面子とやらの為に依頼を達成した後、貴族の雇った別の者に殺されそうになったこともあつた。

まあ、そんなことを考えていると、顔の表情というものは変わっていくもので、それを見たのであろう、ひとりの男が話しかけてきた。

「おっちゃん、一人にらめっこでもしてるのか？」

正直気持ち悪いぜ」

話しかけてきた男の名はスレイ。

黒の髪を肩程度まで伸ばし、中肉中背の優男、と言った風体の男である。

その青い瞳は何時だろうと彼の興味の強さを表すかの如く輝いている。

田舎の生活に飽き、名誉を、金を得るためにこの国にやってきて、今はこの宿に所属している。

実に冒険者らしい冒険者であり、人格は明るく、新米ながらも他の冒険者の覚えも良い。

まあ、難点をあげるとすれば、少しばかりお調子者である、というところであろうか。

「気持ち悪いとは失礼だな。」

俺には客の姿を見て感慨に浸ることも許されんのか?」

無然とした表情でガリアスが言う。

「ごめんごめん、気持ち悪かったは言い過ぎたよ。けど、何を考えてたんだ?

酒の肴にでも話しちゃくれないか、おっちゃんの話、結構面白いんだよ」

そう言ってスレイは人懐っこい笑顔を浮かべた。

「ふん、特に面白い話でもないと思うぞ。」

ただ、この何もはばかりことなく語らい、笑い合っている姿がいい、そう思っていただけだ」

その言葉を聞いたスレイは不思議そうな顔をした。

「普通じゃねえの?

俺の田舎じゃあこんな光景は腐るほどあったぜ?」

心底不思議そうにスレイは言う。

それを聞き、ガリアスはその表情を緩めた。

「お前は、幸せなんだぞ。」

俺が生まれたところは、そんなことはなかった。

いや、違うな、俺の育ったところは、だな」

どこか遠くを見るような目をして、ガリアスは話を切った。

「まあ、面白い話でもないし、人に聞かせるような話でもない。

もしも続きを聞きたいなら、俺に酒の飲み比べで勝ったなら、話してやるぞ?」

そう言ってガリアスはにやりと笑った。

「勘弁してくれよ、おっちゃんに飲み比べで勝てる気はしないっての」

スレイはそう言いながら両手を挙げ、降参降参と言った。

このガリアス、めつぼう酒に強いことはこの宿の冒険者で一度でも共に飲んだ者ならば、その実体験を持って思い知っている。

その強さ、ザルというにふさわしく、嘘か真かはわからないが、数日に渡って休むことなく別の冒険者と酒を酌み交わしながら、少したりとも足をふらつかせることもなかったという話が有り得る、と言われるほどである。

「はっはっは。」

まあ、聞くなつてことだよ」

そう笑いながらガリアスは笑いながらスレイの背を叩く。

かなり強かったためか、スレイの口から何かうめき声のようなものがあがっていたりもした。

まあ、とりあえずいつもと変わらない店内。

数人が酔いつぶれてたりもするが、きつと親しいものが連れていくことだろう。

もしかすると多少不埒なことを考えて酔い潰したものも居るかもしれないが、自由であるということは責任を持つということである。そこまでの責任は取れない。

こうやって一日が暮れていくのだが、今日は違った。

扉が開く。

いや、それ自体は普通のことだ。

宿の扉は一つしかないのだから、この宿に泊まってる者以外だったら、外から入ってくるし帰りもする。

問題は入ってきた人物。

それは騎士であった。

全身をちゃんとした鎧で包み、紋章入りの武器を掲げている。

店内の空気が少し変わる。

心なしか店内を覆っていた暖かい空気が冷えた気がした。

冒険者と騎士は相容れぬものだ。

冒険者は誰の依頼でもこなす。

騎士は自らの使える者からの依頼をこなす。

冒険者は依頼を選べる。

騎士は依頼を選んではいけない。

冒険者は生き方だ。

騎士は職業だ。

似ているようで正反対の存在である。

冒険者は騎士を嫌っている。

自由を捨て、貴族や国、自らより力を持つものに庇護されるために魂を売った畜生だと。

そして騎士は冒険者を見下している。

自由だとか言って、自らの好きに動き人の作り上げた秩序を乱す無法者だと。

両方の思考は互いに間違っている。

しかしそれに気付くことはあるのかはわからない。

ただ、今の両者は互いに牽制しあっている。

故に、騎士が冒険者の宿を訪れるということはあり得るはずがないことだ。

それは火薬庫に火を持ちこむのに等しい行為だ。

「・・・騎士様が、何の用だ？」

いくぶん重くなった店内の空気を振り払うためか、少々どすの利いた声でガリアスは入ってきた騎士に声をかけた。

声をかけられた騎士は驚いたように周りを見回し、自らを指した目をきよとんとさせている姿は威厳の欠片もなかった。

「お前以外にだれがいるんだ・・・」

少し店内の緊張が緩む。

ガリアスは騎士を改めて観察する。

年のころはおそらく20前後、金色の髪は短く切りそろえている。

驚きに丸くした瞳の色は紅。

顔の作りはまあ、凛々しい、と言った感じを受けないこともないが、どちらかというところ可愛い、といった印象を受けることであろう。今の目を丸くしている状態ならなおさらのことだが。

「あ、申し訳ありません。

確かに誤解させてしまったかもしれませんが、私は騎士ではありません」

ハツとした感じで騎士は言った。

「騎士じゃない？」

しかし、その鎧は・・・俺の覚えが確かならフェリ神の聖堂騎士に与えられるもののはずだが？」

記憶を手繰り、その神の名を口にする。

フェリ神はこの世界の中でもかなりメジャーな女神の名であり、炎を象徴とされ、破壊、再生をつかさどる女神である。

「先日までそうでした。

けれど、辞めてきました」

騎士をやめた、そう言った顔はどこかさっぱりしていた。

いうのは簡単だが、それはとても信じられるものではなかった。

なぜなら騎士というものになるには数年かけて騎士学校を卒業し、そのうえで試験に通らなければならない。

そして、フェリ神ほどもメジャー神の聖堂騎士ともなれば、数百年に一人受かるか受からないか、というほどの難関である。

それほどの苦勞を超えて手に入れたものを目の前の騎士は捨てたと言ったのだ。

「・・・何故だ？」

ガリアスの口からは自然と疑問の声が出ていた。

「何故・・・ですか、まあ父にも言われましたね、その台詞」

騎士はくすくすと笑った後、言葉をつづけた。

「騎士では、復讐は果たせぬ、そう思ったからです」

そう口にした瞬間の瞳を見て、ガリアスはぞっとした。

どれほどの憎しみが込められているのか。

その瞳はぞっとするほど冷たいものだった。

「つまり、復讐の為に騎士を辞め、冒険者になりに来たってことか？」

その冷たさに、身震いしながらもガリアスは尋ねた。

「ええ、その通りです。」

父から、ここを勧められまして」

そう言っただけで笑んだ彼の瞳はすでにぞっとするものではなく、可愛らしさを装飾する一部分でしかなくなっていた。

本当の騎士ではない、それが判明したからか、宿内の空気はまたいつも通りのものになり始めていた。

もっとも、冒険者達の興味が、彼に集中しているのは確かではあったが。

「ふむ、俺の知り合いだっただけのことか、お前の父は」

そう尋ねながらガリアスは思考を巡らせる。

知り合いが多すぎて見当もつかない。

「ええ、そう言っただけだね。」

ああそうだ、手紙を預かってきたんだった」

そう言っただけで、騎士は荷物を探り始める。

荷物は背負い袋一つだけで、あと身に着けているものと言えば、背にハルバードを背負っている位であった。

「ああ、あったあった」

そう言っただけで騎士は多少折れ曲がった手紙を取り出した。

「これを読めば分かってもらえる、そう父はおっしゃっております」

騎士はガリアスに手紙を渡した。

印章付きの手紙、その印章は覚えのあるものだった。

「……あいつか、久々にもほどがあるぞ、まったく」

そう言っただけでガリアスは頭をかいた。

「いい友であった、父もそう言っております。」

それで、私はどこにいればいいでしょう？」

所在なさに騎士は周りを見回している。

「あー、そうだな。」

あいつの紹介なら問題はないだろ、ほら」

ガリアスは鍵を騎士に投げ渡す。

「その部屋に荷物置いて、このカウンターにでも座ってな。手紙を読み終わったら登録だのなんだのするからな」

そう言っ、ガリアスは奥へと引っ込んでいった。

騎士も、部屋の番号を確認し、階上へと上がって行った。

第一話 訪れる騎士（後書き）

第一話となります。

一人称じゃないようにできるだけ頑張ったつもりですが、どうでしょうか？

次の話も一週間以内を目指します。

どうかこんな話で良ければ見てやってください。

第二話 手紙の内容（前書き）

この物語はフィクションです。

人物、国家、組織名等は実在のものとは一切関係ありません。

魔法といったものは現実世界では存在せず、仮に存在していたとしてもその存在が明らかにはなっておりません。

第二話 手紙の内容

ガリアスはカウンターの奥の厨房に引っ込み、手紙を開ける。

手紙の主の名はヴァン・アイス、かつて共に旅をした一人である。冒険者という職がちゃんと認められたのは、確かに古い。

しかし、冒険者の宿、というものが整備され始め、それぞれが連携し、国や一般市民からの依頼を受けるようになったのはここ十数年のことである。

それまでは、冒険者は世界を旅し、自らで依頼を探していた。

冒険者と盗賊、その違いは考え方ぐらいで、人によっては盗賊扱いされることもあった。

そんな時代を共に過ごした仲間。

パーティーを解散して、すっかり疎遠になってしまったが、今でもあのころの思い出は目をつぶれば容易に思い出することができる。

ヴァンは神官だった。

神官、それは神の力を借り、その慈愛を持って傷ついたものを癒し、魔物を駆逐する。

それがすべてだと思ってるような生き物だ。

まあ、冒険者になるような奴は大抵、そういう上品な空気になじめなかったり、家庭の事情だったりで神官としての道を閉ざされたものがほとんどのため、大抵がひねくれていたり、少し変わっていたりするやつが多い。

もちろん、ヴァンも例外にもれず、変わっていた。

それも神官としてはおかしいぐらいに。

フェリ神に使える者には三つの禁忌があるとされる。

一つ、酒を飲むべからず。

これはフェリ神以外のほとんどでも共通している禁忌である。

理由として、酒を飲むことにより、人はその理性を失う。

そしてそれは神が与えた『人』という進化を捨て、獣へと戻って

しまうからだと言われている。

しかし、ヴァンは酒を平気で飲んでいたし、酔ってその勢いで暴れたことも一度や二度では済まなかった。

一つ、金銭に執着するべからず。

これは、フェリ神特有の禁忌である。

理由として、金銭は人を不平等にする原因である。

故に、生きていく上で必要な金銭。

衣食住、それ以上の資金を持つことを禁じた。

もつとも、不測の事態が起こればそれ以上の金銭が必要となることは必然。

故に、勤める神官達に何かあった場合は神殿から金銭が支給されるため、神殿に仕える神官は給料を得て、そのほぼすべてを寄付という形で神殿に返却している。

また、旅をしている神官は最低限の衣服に、最低限の食事、そして雨露をしのげることができればその健康を乱すことなく生きていく強靱な者に限られる。

何故なら、旅の先にある神殿にて事情を話し、金銭を得る以外で金銭を得ることは禁忌とされているからである。

そのため、冒険者として働く者も、普通の神官よりは身を守るために上等なものを身に着けるものの、稼ぎのほとんどを神殿に寄付するものがほとんどである。

しかし、ヴァンは先にあげた酒はもちろん食事にも金は惜しまなかった。

派手な装飾品は買出し、気に入った女性が望むものを買ってやる。そんな男だった。

一つ、全ての人間に愛を注ぐべし。

これは女神によく見られる禁忌で、禁忌というよりは、教義なのかもしれないがとりあえずは守るべきこと、破るべきではないこと、ということに禁忌としておこう。

これに関して言えばヴァンは熱心なフェリ神官だったと言えるか

もしれない。

先にあげたように、女性には優しく接したし、男だって基本的に酷い接し方はしなかった。

困ってる奴を放っておけないやつだった。

だが、人間以外にも甘いやつではあった。

この禁忌は人間に、であり、裏を返せば人間に仇なすものは愛す必要はない、とも言っている。

実際、教会にとって人間の敵である魔物は殺すべきものであり、神官騎士のほとんどはそれを迷うこともしない。

しかし、ヴァンは命乞いをする者は許したし、少しでも話ができるものなら説得しようとするような奴だった。

結果は、見逃した奴から不意打ちされたり、話も聞くことなく襲いかかられたり、ガリアス達も危険にさらすようなことも多々あった。

それでも、その姿勢は変わることはなかった。

危険にさらされるたびに問い詰めたが、多くは語りはしなかった。そんなヴァンにも、冒険者としての活躍が認められてか、フェリ神の総本山から上位神官としての誘いが来た。

ガリアスはつきり断るものだと思っていたが、意外にもヴァンはその誘いを受けた。

正直、戦うことに疲れていた、ということもあり、そこで次の神官を探すこともなくガリアス達のパーティーは解散となった。

ガリアスは、貯めていた資金を元手に、今の冒険者の宿を作り、他の宿などとも提携し、今のシステムを作り上げること 시작했다。ヴァンは上位神官として、頑張っている。

その話だけは風の噂で聞いていた。

それを聞きたびに、さぞ苦労していることだろうな、と思ったものだ。

他の二人は、付き合っていた。

そしてパーティーの解散を機に、冒険者とは関わりを無くした。

最後にあつたのはその結婚式のことだった。

正直、女性と言う者にはとんと縁のないガリアスにとってはまぶしい以外の何物でもなかったが、二人とも幸せそうに笑っていた。その時に言っていたことによると、男の方の実家に帰り、共に暮らすとのことだった。

懐かしい思い出は、思い返せば返すだけでくる。

しかし、ガリアスは気を取り直して目の前の手紙に集中しなおした。

懐かしいのも、信頼できるのも確かだが人は変わるものだ。

もしかすると送られてきた手紙には思いもよらないことが書かれているかもしれない。

そう自分に言い聞かせ、気を引き締め手紙の封を開けた。

拝啓 禿親父殿

相も変わらずその頭を光らせて、元気でいることと思われる。

神官の仕事をしながら、貴殿の宿の話が出るたび、懐かしく思う。

あの頃は、この手紙の文のような言葉使いでも、咎められることなく話せたものだ。

今の生活は確かに平和で安定してはいるが、窮屈でしょうがない。時々、ふらりと旅に出ようとしている自分に気づき、戒める日々だ。

まあ、こんなことを知らせるために手紙を持たせたわけではない。今回はいきなりの訪問で驚かせたことと思う。

お前があまり騎士に対して良い思いを持っていないことは重々承知している。

しかし、あの子は多分騎士の恰好のまま行ったことであろう。

あの子に代わり、ここで謝しておく。

今回、あの子が貴殿の宿を訪れたのは、他でもないあの子が冒険者になりたいと言ったからだ。

一人でも飛び出していきそうなあの子を説得するのはかなり骨が

折れたが、説得の結果信用できる貴殿の宿の世話になることを了承させた。

腕前は、騎士の試験に一発で合格し、聖堂騎士に配属されるほどの問題はないと思う。

何故、辞めたのかそれを聞きたいと思う。

それは、あの子の生い立ちから説明しなくてはならない。

あの子は私の実の子ではない、あの二人の子だ。

共に旅をし、苦楽を共にしたあの二人の子だ。

何故、私が預かっているのか、それは、彼らが殺されたからだ。

魔物の襲撃によって、彼らは殺された。

きつと、貴殿は知らなかったであろう。

神殿と、その国の間で隠されることとなったからだ。

前線から離れた村が襲われ、そこに住んでいたものがすべて殺されたなど知れば、どれほどのパニックになるかは計り知れない。

それ故に隠された。

もう、五年も前のことになる。

その時の唯一の生き残りがあの子だ。

目の前で、両親を、兄を、親しかったものをすべて殺された。

あの子の魔物の憎みようは恐ろしいと思えるほどだ。

あの子自身は前線への配属を望んでいたらしいが、優秀であるゆえに聖堂騎士へと任命され、戦わずにお飾りとなっているのに耐えられなかったのだろう。

そして、冒険者ならば、と思ったそうだ。

どうか、あの子を見守ってやってほしい。

私は、ここから動けぬ身だ。

危険に会うことは分かるが、できる限り見守ってやってほしい。

親馬鹿だとは思うが、よろしく頼みたい。

きつと、あの子自身、いつかは明かすかもしれないが貴殿だけに伝えておく。

あの子は・・・あの二人の娘だ。

あの子自身、女であればきつと危険なことなどするな、などと言われる。

そう思つて隠している。

鎧を決して脱がないこともそれが理由だ。

あの子が明かさない限り、それを隠すことに關してもさりげなく手伝つてほしい。

無茶なことを言つていゝとは思つが、あの子の両親のことを知つてゐる貴殿にしか頼めぬことだ。

なにかあれば、手紙を送つてくれでゐることであれば手伝おう。

貴殿の友人　ヴァン・アイス

手紙を読み終わり、無意識のうちに手紙を持つてゐた手が強張つてゐることに気付く。

あの二人が死んだ。

その事實はガリアスの心を乱すのには十分な事實であつた。

そして、それを知つた今、変わらず接することがでゐるか、それが不安でもあつた。

親しかつた二人の娘、それを他の冒険者と同じように使えるのか。

「はあ、まったく面倒なことを・・・」

ガリアスは頭を抱えたままそう呟いた。

「あいつらが・・・な、どんなやつだ・・・」

調べて・・・みるか、仇はとつてやらんとな」

そうして頭をあげると、そこには確かな怒りがぎざまれてゐた。それに気づき、苦笑したあと、いつもの顔に戻る。

そして、かの騎士が待つてゐるであろう店内へと戻つて行つた。

第二話 手紙の内容（後書き）

少し、予告していた時間をオーバーしてしまいました。
読んでいただいてる方、ありがとうございます。

日々、アクセス件数を見てはそわそわしている作者です。

第三話 もう戻らない日（前書き）

この物語はフィクションです。

人物、国家、組織名等は実在のものとは一切関係ありません。

魔法といったものは現実世界では存在せず、仮に存在していたとしてもその存在が明らかにはなっておりません。

第三話 もう戻らない日

騎士は、渡された鍵を使って戸を開けた。

そこは、簡素なベッド、机、そして一つの窓。

それしかない部屋だった。

床には埃が積もっているということもなく、ちゃんと掃除がされているであろうことは明白であった。

「ここが・・・私の部屋、か」

荷物を置き、ベッドに腰掛ける。

考えてみればずっと歩きづめだった。

あちらを出て、寝る時間を除いてはずっと歩いて、ここまでたどり着いた。

その寝る時間ですら最小限だ、消耗するのも当たり前だ。

騎士を辞める、そう言った時の神官様の諦めたような顔を思い出す。

そして何も言わずに渡してくれた手紙。

あれには、なにが書いてあったのかそれを知る術はない。

だが、きつと積もる話もあるのだろう。

聞いた話では、あの店主は冒険者時代の知り合いだと言っていた。両親のことを知っている、それと同義のことだ。

両親のことを思うと今でも心がきしむ。

胸のあたりが苦しくなる。

私が、私がつとちゃんとしていれば死ななかったのに。

きつと、今でも私に笑いかけてくれたはずだというのに。

「また、泣いていますね。」

こんなことで泣くなんて許されない、私が泣くのはあいつを、殺した時。

嬉しさで泣く時だけなのに・・・」

そう言いながらも、頬を伝う涙は止められない。

両親の、兄の顔が脳裏に浮かび、微笑みかけてくる。きつと、死んだ皆は望みはしない。

皆、私を大切にしてくれていた。

私が傷つくようなことを望みはしないだろう。

けれど、私は止まらない。

あの時、あの場所で私は誓ったのだから。

この身、朽ち果てようともあいつを殺すと。

目をつぶれば思い出せる光景は多くある。

それは、両親の顔であり、兄の顔であり、あいつの顔でもある。

心に刺さるは赤の色。

燃えてゆく家、愛した人から流れる血、私を嘲るあいつの瞳の色。その全てが赤だった。

今は怯えることはないが、昔は炎を怖がっていた。

フェリ神の象徴であるはずの炎でさえ、あいつが見ているような気がして。

「あいつだけは・・・あいつだけは」

そう呟きながら体がベッドの上に横たわったのを感じた。意識してのことではない、体が限界だと言っているのだ。

「いけない、ここで寝ちゃ・・・」

必死に体を起こそうとするが、体が言うことを聞かない。

鎧のまま寝ることになったこの身は、着たままとて、違和感なく眠りへと落ちていった。

ふと、目の前の光景がわからなかった。

目の前には鏡があつて、そこにはドレスを着た幼い少女が立っている。

鏡なのだから、それは私だ。

私の名前はアーシエ、アーシエ・リウス。

何故それがわからなかったのか、自分自身からない。

自らの恰好を改めて見直す。

瞳は深紅、まるでルビーのようだ、と兄は言ってくれた。
髪は金、母譲りの綺麗な金色で、母はこの髪を梳きながら自分の
若いころの話をしてくれる。

体つきは・・・まあ、年相応、であろう。

少し胸が小さい気もするが、年相応だ。

きっとこれから大きくなる、うんそうに決まってる。

自分に言い聞かせ、頷く。

服は青のドレス、一年前の今日に父からもらったものだ。

父は無骨な武人だから、きっと探すのは大変だったろう。

母に後から聞いたが、母が手伝おうとすると、『誕生日のプレゼントぐらい、俺の選んだものにしたい』と言って、手伝いを拒否して必死に探していたらしい。

自分自身、送られたドレスをとても気に入っていた。

父がそこまで必死になって選んだ、というのも理由の一つではあったが、色、手触り、装飾、そのどれをとっても私の好みのものだった。

それを身にまとう今日は私の十の誕生日。

鏡を見て自分の姿を見るのはいったい何度目になることだろうか。でも、今日は特別なのだ、少しでもみつともないことがあれば、私はおろか、家の評判に関わってしまう。

家族が聞けばきっと笑うだろう。

そこまで気にする必要なんてない。

それでも、私は気にしてしまう。

私の家は、武の名門として名をはせている家だ。

兄も父も共に国の騎士として働いている。

私は生まれつき体が弱くて、わずかな運動ならともかく、前線で戦うことなどできない。

そのことを、家族は何も言わない。

けれど、私は知っている。

私が他の家からなんと言われているのかを。

『出来損ないのお人形』

武の名門である家に泥を塗っている、その自覚はあった。その言葉を聞いたのは、他の家のパーティーに呼ばれた時だった。道に迷い、たまたま聞いてしまった。

あのお人形は何も知らないな、そう言っていた。

その時は、良くわからなかった。

けどその後、家族に隠れて調べると、いろんなことが分かった。自分が使い物にならないことがどれほど家族に負担をかけたのか。如何に自分が何も知らない『お人形』であったかを。

私の体の弱さは生まれながらに判明していたらしい。

その時点で上がったのは里子に出す、というものであった。

国の盾であり、矛である家にそれ以外のものが生まれた、その事実がいけないのだと。

傍から見れば笑ってしまふような理由だ。

しかしそれは凶兆だ、と信じられていた。

だから家から離すべきだと。

父はそれに反発した。

自らの子を自らで育てる、その何がいけないのかと激怒したという。

父自身、若いころに家を飛び出て、冒険者として過ごしていたため、あまり他の家のからの印象は良くなかったというのに、それでさらに関係が悪化したという話も聞いた。

だから・・・せめて人形ならば他の家にも誇れるほどきれいなお人形で居よう。

そう決心した。

そうすれば、泥を塗るだけではなくるはずだと、むしろ家の名を輝かすことだってできるはずだと、そう思っ

て。そのためにも、今日のパーティーは恥をかくわけにはいかない。

十の誕生日とは、一つの節目であり、男女関わらず、盛大なパーティーとなる。

内輪だけではなく、他家の者も招いての。

この場で何か恥をかけば、それを拭うのは決して楽なことではないだろう。

それは裏を返せば、この場で高評価を得ればそれは確かな評価だと知れ渡ることだ。

だから、少しでも不備があつてはいけなさと鏡に映った自分の姿を凝視する。

「おい、そろそろ始まるぞー」

声と同時にドアをノックする音が聞こえる。

兄の声だった。

言われて、時計を見るとパーティーの開始時間はもうそこにまで迫っていた。

いくら恰好がきちんとしていても、遅れては格好がつかない。

「はい、兄様 今行きます！」

「わかった、遅れるなよ」

私の言葉に安心したのか、兄が去っていくのを感じた。持つて行くものをきちんとは揃えて、ドアへと向かう。

「わっ・・・と」

ドアを開け、走り出そうとしたとき、何かにぶつかった。

見えるのはワインレッドのスーツ。

顔をあげると、そこには紳士然とした男の顔があった。

「おやお嬢さん、危ないですよ？」

そう言つて男は微笑んだ。

世辞抜きにきれいな人だった。

「貴女のようなきれいな人に見つめられると照れてしまいますよ」

少しの間、見惚れて声も出せないでいると男は困ったように笑いながら言った。

「も、申し訳ありません。」

急いでいたもので・・・」

謝ることもせず見惚れていた事実を恥じ、頭を下げる。

顔が赤くなるのを感じながら。

「いえいえ、私もつつたつていたのがいけなかった。

どうにも、道に迷いましてね、途方に暮れていたのですよ」

彼がそう言いなが手に持った紙に目を落とす。

その紙は、私のパーティーの招待状だった。

「私もそこに向かうところですよ、ご一緒しませんか？」

私がそう声をかけると、男は安心したような顔をした。

「そうでしたか、それはありがたい。

お願いします」

「ええ、お任せください」

私は、主役が私だとわかったら男はさぞびっくりするだろう、そう少し思いながら男の前に立って歩き始めた。

こんこんとドアを叩く音に目を覚ます。

時計を見ると、眠ってから三十分ほどたつていたようだ。

「おっちゃんと呼んでるぜ」

返事をする、ドアの向こうからはそう返ってきた。

「いけない、気が緩んでいるな」

いくら部屋の中とはいえ、実に無防備だった。

信用ができない、というわけではないが知られてはいけないのだ、

この身が女だとは。

だというのに・・・。

見ていた夢を思い出し、首を振る。

もう、戻りはしないのだあんな日々は。

そして同時に安堵した。

自分があいつの顔を忘れていないという事実。

「急がないと、迷惑になってしまう」

そう言っ戸に手をかける。

涙は、もう乾いていた。

第三話 もう戻らない日（後書き）

投稿できてなかったorz

すっかり遅れて申し訳ない、これから頑張って行きますのでどうか見捨てないで見てやってください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4977x/>

騎士を燃やすは復讐の炎

2011年11月12日03時23分発行